

昭和年間の蚕糸業の推移における問題点

—養蚕業と製糸業の衰退過程の類似性について—

菱 谷 政 種*

Problem in the change of silk-reeling industry in the Showa Era

— about the similarity of process of decline of both sericulture and filature —

Masatane HISHITANI

This report deals with a problem in the change of silk-reeling industry of the Showa Era. This problem is related to the similarity of process of decline of both sericulture and filature. In order to get this purpose, the author investigated the statistics of both sericulture and filature in the Showa Era. In conclusion, the author thinks that both industry have the similarity of process of decline.

Why both industry have the similar process to decline? The author thinks that there are two reasons to take into consideration. The first is a technical reason, and the second is a political one. The raw materials of the filature are limited to cocoon, the output of sericulture. This is first reason. Next, Japanese sericultural policy had laid her emphasis on promotion of domestic industry, Japanese sericulture. This is second reason. Therefore, Japanese sericulture had had the double function to monopolize the raw materials of Japanese filature. And so, the decline of sericulture necessarily caused the decline of filature.

1. はしがき

この研究は、昭和元年より同63年に至る63年間を対象とする。この63年間は、正に昭和という年号を以て表わされる期間である。最初に、この研究を発意するに至った動機から述べておく。

昨今、蚕糸業は、厳しい経済不況に見舞われ、一説によると、蚕糸業はこのまま消滅して仕舞うのではないかとさえ危惧されている。小野直達氏は、近著「現代蚕糸業と養蚕経営—日本養蚕は生き残れるか」(農林統計協会1996年3月発行)の中で、次の如く述べられている。

「私事ながら、養蚕業を学問対象として、約21年間が経ち、その間産業としての養蚕業、ひいては蚕糸業は、ここ10数年間には加速度的後退にあり、なかでも繭生産の担い手たる養蚕農家の

* 経営工学科

減少は激しく、蚕糸業存立の危機的事態の進展をみせている。」(傍点引用者)(同書「はしがき」より引用。)

私は、この「書評」を「農業経済研究」(日本農業経済学会発行)に寄稿する一方において、改めて蚕糸業の推移について観察した。本稿は、この作業の過程において気付いた点—とくに養蚕業と製糸業の衰退の過程の類似性—をまとめたものである。まず最初に、63年間の蚕糸業に関する諸統計を列举し、簡単な注釈を加えておく。

2. 昭和年間における耕地面積、畑面積、桑栽培面積の推移

第1表 昭和年間における耕地面積、畑面積、桑栽培面積の推移

	耕地面積 (A)		畑面積 (B)		桑栽培面積 (C)		C/A	C/B
	実数	指数	実数	指数	実数	指数		
昭和元年	6,030 千ha	100	2,937 千ha	100	5,666 百ha	100	9.4%	19.3%
3	6,035	100	2,914	99	6,034	106	10.0	20.7
5	5,867	97	2,690	92	7,076	125	12.1	26.3
7	5,943	99	2,749	94	6,464	114	10.9	23.5
9	5,988	99	2,796	95	6,170	109	10.3	22.1
11	6,036	100	2,845	97	5,606	99	9.3	19.7
13	6,028	100	2,846	97	5,438	96	9.0	19.1
15	6,027	100	2,847	97	5,282	93	8.8	18.6
17	5,764	96	2,627	89	4,081	72	7.1	15.6
19	5,468	91	2,434	83	3,022	53	5.5	12.4
21	4,945	82	2,109	72	1,847	33	3.7	8.8
23	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A
25	5,049	84	2,196	75	1,748	31	3.5	8.0
27	5,401	90	2,396	82	1,719	30	3.2	7.2
29	N. A	N. A	N. A	N. A	1,806	32	N. A	N. A
31	6,013	100	2,692	92	1,912	34	3.2	7.3
33	6,064	101	2,719	93	1,891	33	3.1	7.1
35	6,071	101	2,690	92	1,656	29	2.7	6.2
37	6,081	101	2,688	92	1,617	29	2.7	6.0
39	6,042	100	2,650	90	1,637	29	2.7	6.2
41	5,996	99	2,600	89	1,617	29	2.7	6.2
43	5,897	98	2,462	84	1,618	29	2.7	6.8
45	5,796	96	2,381	81	1,631	29	2.8	6.9
47	5,683	94	2,371	81	1,641	29	2.9	6.9
49	5,615	93	2,406	82	1,581	28	2.8	6.6
51	5,536	92	2,392	81	1,434	25	2.6	6.0
53	5,494	91	2,386	81	1,295	23	2.4	5.4
55	5,461	91	2,406	82	1,212	21	2.2	5.0
57	5,426	90	2,416	82	1,130	20	2.1	4.7
59	5,396	89	2,425	83	1,048	18	1.9	4.3
61	5,358	89	2,427	83	885	16	1.7	3.6
63	5,317	88	2,428	83	642	11	1.2	2.6

(注) 蚕糸業要覧その他による。

昭和年間における耕地面積、畑面積、桑栽培面積および関係比率を見ると（第1表参照）、耕地面積、畑面積、桑栽培面積ともに、第二次世界大戦を中に挟み、減退の傾向を示している。しかし、戦争終了後は、耕地面積、畑面積ともに、ほぼ回復の模様を示してはいるが、ひとり桑栽培面積のみ、その後もさらに減退を示し、昭和50年ごろよりは、急角度の減退傾向を示している。桑栽培面積の耕地面積、畑面積に対する比率も、昭和初頭の蚕糸業最盛期においては、耕地面積の10%（最高12.1%…昭和5年）畑面積の20%以上（最高26.3%…同年）を占めた（1）。しかし、今や、この比率は耕地に対しては1～2%畑地に対しては3～4%を占めるに過ぎず、いかに激しい減退傾向にあるかを明示している。

注（1）この比率は紀要の紙幅の関係から、年次を隔年ごとにとっているため、あるいはもっと高い比率を示す年次が消去されている可能性のあることを否定するものではない。

3. 昭和年間における農家戸数、養蚕戸数、蚕種掃立卵量、繭生産量の推移

第2表 農家戸数、養蚕戸数、蚕種掃立卵量、繭生産量の推移

	農家戸数（A）		養蚕戸数（B）		蚕種掃立卵量（C）		繭生産量（D）		B/A	C/B	D/B
	実数	指数	実数	指数	実数	指数	実数	指数			
昭和元年	5,555 千戸	100	2,054 千戸	100	14,386 千箱	100	325 千トン	100	37.0 %	7.0 箱	158 kg
3	5,576	100	2,158	105	15,137	105	351	108	38.7	7.0	163
5	5,600	101	2,208	107	15,115	105	399	123	39.4	6.8	181
7	5,643	102	2,057	100	14,251	99	335	103	36.5	6.9	163
9	5,617	101	1,988	97	13,736	95	326	100	35.4	6.9	164
11	5,597	101	1,848	90	12,434	86	310	96	33.0	6.7	168
13	5,519	99	1,688	82	10,933	76	281	87	30.6	6.5	167
15	5,480	99	1,635	80	10,989	76	327	101	29.8	6.7	200
17	5,505	99	1,416	69	7,962	55	209	64	25.7	5.6	148
19	5,537	100	1,138	55	6,261	44	151	46	20.6	5.5	132
21	5,698	103	876	43	2,778	19	68	21	15.4	3.2	78
23	N. A	N. A	827	40	2,354	16	64	20	N. A	2.8	77
25	6,176	111	834	41	2,520	18	80	25	13.5	3.0	96
27	N. A	N. A	796	39	3,236	22	103	32	N. A	4.1	130
29	6,105	110	809	39	3,349	23	100	31	13.3	4.1	124
31	N. A	N. A	789	38	3,926	27	108	33	N. A	5.0	137
33	N. A	N. A	729	35	4,115	29	116	36	N. A	5.6	160
35	6,057	109	645	31	3,896	27	111	34	10.6	6.0	172
37	5,826	105	596	29	3,802	26	109	34	10.2	6.4	183
39	5,667	102	551	27	3,822	27	111	34	9.7	6.9	203
41	5,498	99	477	23	3,535	25	105	32	8.7	7.4	221
43	5,351	96	455	22	3,978	28	121	37	8.5	8.7	266
45	5,342	96	399	19	3,685	26	111	34	7.5	9.2	280
47	5,170	93	327	16	3,307	23	105	32	6.4	10.1	319
49	5,081	91	281	14	3,187	22	101	31	5.5	11.3	363
51	4,891	88	225	11	2,726	19	87	27	4.6	12.1	390
53	4,788	86	187	9	2,432	17	77	24	3.9	13.0	415
55	4,661	84	165	8	2,265	16	73	22	3.5	13.7	443
57	4,567	82	138	7	1,890	13	63	19	3.0	13.7	459
59	4,473	81	113	6	1,521	11	50	15	2.5	13.5	450
61	4,331	78	86	4	1,185	8	41	13	2.0	13.8	482
63	4,240	76	62	3	855	6	29	9	1.5	13.8	477

（注）蚕糸業要覧その他による。

つづいて第2表において、昭和年間の農家戸数、養蚕戸数、蚕種掃立卵量、繭生産量の推移を観察することにする。

農家戸数については、耕地面積、畑面積の推移と同じで、大体80%前後の値を示している。しかし、養蚕戸数、蚕種掃立卵量、繭生産量については、驚くべき減少割合を示しており、すべて昭和元年の10%以下に減退している。蚕種掃立卵量や繭生産量については、戦後一時期回復基調にあったが、昭和40年代後半より連年減退を示し、とくに最近の減り方は異常に激しいものがある。

養蚕戸数を農家戸数で除した養蚕農家率（第2表のB/A欄参照）も、戦前の最盛期に40%近くを示したが、今や1.5%というきわめて低い比率となっている。ただし現に存在する養蚕農家の一戸当り掃立卵量（C/B）や繭生産量（D/B）は戦前を上回って大規模化の傾向を示しているが、しかし、それは全体として養蚕業の落潮傾向に歯止めをかけるものとはなっていない。

4. 昭和年間における生糸生産数量、生糸輸出数量、器械製糸工場数の推移

第3表 生糸生産数量、生糸輸出数量、器械製糸工場数の推移

	生糸生産数量 (A)		生糸輸出数量 (B)		器械製糸工場数 (C)		B/A		A/C	
	実数	指数	実数	指数	実数	指数	実数	指数	実数	指数
昭和元年	568.8 千俵	100	442.9 千俵	100	3,768 工場	100	77.9 %	100	150 俵	100
3	661.5	116	549.2	124	3,509	93	83.0	106	188	125
5	710.3	125	477.4	108	3,759	100	67.2	86	188	125
7	693.1	122	582.2	131	3,356	89	84.0	108	206	137
9	754.0	133	552.2	125	3,013	80	73.2	94	250	167
11	705.4	124	505.3	114	2,408	64	71.6	92	292	195
13	719.2	126	477.9	108	1,837	49	66.4	85	391	261
15	712.8	125	293.6	66	1,773	47	41.2	53	402	268
17	452.9	80	8.1	2	532	14	1.8	2	851	567
19	154.0	27	1.0	0	192	5	0	0	802	535
21	94.1	17	86.4	20	290	8	91.8	118	324	216
23	144.3	25	80.0	18	301	8	55.4	71	479	319
25	176.9	31	94.6	21	300	8	53.5	78	589	393
27	256.6	45	70.1	16	292	8	27.3	35	878	585
29	257.9	45	75.9	17	296	8	29.4	38	871	581
31	312.7	55	75.3	17	289	8	24.1	31	1,082	721
33	333.5	59	46.7	11	251	7	14.0	18	1,328	885
35	300.7	53	88.3	20	218	6	29.4	38	1,379	919
37	331.6	58	77.4	17	198	5	23.3	30	1,674	1,116
39	324.3	57	37.2	8	186	5	11.5	15	1,743	1,162
41	311.5	55	8.7	2	174	5	2.8	4	1,790	1,193
43	345.9	61	9.4	2	167	4	2.7	3	2,071	1,381
45	341.9	60	1.2	0	157	4	0.4	1	2,177	1,451
47	318.9	56	0.3	0	151	4	0	0	2,112	1,408
49	315.6	55	0	0	143	4	0	0	2,206	1,471
51	298.0	52	0	0	137	4	0	0	2,175	1,450
53	265.9	47	0	0	134	4	0	0	1,984	1,323
55	269.2	47	0	0	131	3	0	0	2,055	1,370
57	216.5	38	0	0	127	3	0	0	1,704	1,136
59	179.6	32	0	0	94	2	0	0	1,910	1,273
61	139.0	24	0	0	81	2	0	0	1,716	1,144
63	114.3	20	0	0	75	2	0	0	1,524	1,016

(注) 蚕糸業要覧その他による、A/Cは擬制値（分子のAには器械製糸以外の工場の生産数量が含まれる）

さらに生糸生産数量、生糸輸出数量、器械製糸工場数の推移をみておく。(第3表参照)

表より、生糸生産数量は繭生産数量ほどのおちこみを示していないのは、生糸の生産が、国内の繭生産のみに依存しなくなった結果である。しかし、その割合は小さく、これには技術的理由と、わが国の蚕業政策によるものとがある。まず繭輸入の実態を示すと第4表のとおりである。

第4表 繭の輸入状況

	繭(繰糸に適するもの) A		産繭高 B	A/B
	実数	指数		
昭和43年	56トン	100	121千トン	0.0%
45	727	1,298	111	0.7
47	352	628	105	0.3
49	194	346	101	0.2
51	3,736	6,671	87	4.3
53	3,935	7,026	77	5.1
55	1,027	1,834	73	1.4
57	905	1,616	63	1.4
59	295	527	50	0.6
61	47	84	41	0.1
63	487	869	29	1.6

(注)蚕糸業要覧その他による。

表より、昭和51年頃より増加しているが、これは第2表より判るように、その頃より、国内養蚕業の衰退がはじまるからであり、繭の輸入は製糸業免許許可制度の建前上、輸入が許可されたものと考えられる。しかし、その割合は、昭和51年で国内産繭高の4.3%同55年で5.1%に過ぎない。国内における繭の減産はその後もつづくが、繭の輸入は必ずしも増えていない。それは国内における繭需要の基盤である器械製糸工場が廃業などにより縮小しているからと考えられる。

私は、かつて拙著「製糸業の経営構造」(昭和52年)において、つぎのように述べたことがある。

「生糸の生産過程で繭糸の質的特性を本質的に改変することは難しく、しかも製品の出来栄えは原料性状に大きく支配されるという特質のために、製糸経営は、どのような品質水準の繭を購入できるかによって規定される」(同書24頁参照)わけで、外国産の繭は必ずしも歓迎されないわけである。

同時にわが国蚕業政策の建前上、国内の養蚕業優先で、製糸業のために、繭の輸入を行なうことは考えにくい状況下にあったことも事実といえよう。

その意味では、養蚕業は、製糸業を独占的に支配していたといってもよいであろう。戦前はともかく、戦後のこの時期においては、繭の売手独占の立場が貫かれていたとみるべきで、したがって、養蚕業の衰退は、必然的に製糸工場の規模を縮小し、あるいは廃業に追い込んでいったといっても過言ではないであろう。

生糸の輸出は、かつて80%あまりを輸出して、名実ともに輸出の大宗とされた時代から、第2次大戦による壊滅(昭和19年の輸出比率0%)を経て、戦後再び回復(昭和21年の輸出比率91.8%)するが、輸出比率は再び低下して昭和47年には0%となる。生糸が輸出産業としての性格を喪失することは、かつて輸出産業としてもっていた種々の特権、制度なども蚕糸業から失われてゆかざるを得なくなる。蚕糸関係の行政機構の縮小は、国家予算の配分や研究開発のための力をそぐことになった。

器械製糸工場数も昭和のはじめには、3,000工場を越える高水準にあったが、第2次大戦中に激減し、戦後も養蚕業の衰退と比例するように減退し、昭和63年には僅かに75工場を数えるのみとなっている。製糸工場は、器械製糸工場以外にも国用製糸工場があるが規模は零細であり、一応器械製糸工場を以て製糸工場を代表させるとすると、一工場当りの生糸の生産高（A/C）は、昭和49年頃は、2,206俵の最高に達したが、以後漸減産の進展とともに、工場の規模そのものも縮小してゆくのである。工場数も減るし、残った工場の規模も小さくなるという、名実ともに衰退の傾向があらわれてくるのである。

5. 昭和年間における器械製糸運転可能設備台数、器械製糸従業者数、運転可能設備当り生糸生産高、製糸従業者当り生糸生産高、器械製糸工場当り運転可能設備台数、器械製糸工場当り製糸従業者数、器械製糸工場当り繭生産高、同運転可能設備当り繭生産高の推移

第5表-1 器械製糸運転可能設備台数、器械製糸従業者数の推移

	器械製糸運転可能設備台数		器械製糸従業者数		設備当り生糸生産高		従業者当り生糸生産高	
	実数	指数	実数	指数	実数	指数	実数	指数
昭和元年	285.5 千釜	100	345.1 千人	100	1.99 俵	100	1.65 俵	100
3	318.5	111	395.5	115	2.08	104	1.67	101
5	323.7	113	395.3	115	2.19	110	1.80	109
7	277.8	97	338.5	98	2.49	125	2.04	124
9	249.7	87	288.4	84	3.02	152	2.61	158
11	222.2	77	259.3	75	3.17	159	2.72	166
13	191.8	67	218.8	63	3.75	188	3.29	199
15	183.0	64	202.5	59	3.90	196	3.52	213
17	128.0	44	N. A	N. A	3.53	177	N. A	N. A
19	31.3	10	N. A	N. A	4.92	247	N. A	N. A
21	39.0	13	68.3	20	3.01	151	1.38	84
23	49.2	17	83.5	24	3.60	181	1.73	105
25	49.0	17	60.8	18	5.24	263	2.91	176
27	48.6	17	62.3	18	5.31	267	4.11	249
29	48.2	17	58.5	17	5.46	274	4.40	267
31	46.7	16	52.8	15	6.69	336	5.92	359
33	37.4	13	44.3	13	8.92	448	7.52	456
35	22.9	8	29.7	9	13.13	660	10.12	613
37	19.5	7	26.4	8	17.01	855	12.56	761
39	16.4	6	24.2	7	19.77	993	13.40	812
41	14.9	5	21.5	6	20.91	1,051	14.49	878
43	15.0	5	20.4	6	23.06	1,159	16.96	1,028
45	15.0	5	17.8	5	22.79	1,145	19.21	1,164
47	14.0	5	13.8	4	22.78	1,144	23.11	1,401
49	14.0	5	13.2	4	22.54	1,133	23.90	1,448
51	13.8	5	11.2	3	21.59	1,085	26.61	1,613
53	13.3	5	9.4	3	19.99	1,005	28.29	1,715
55	13.2	5	9.4	3	20.39	1,025	28.63	1,735
57	12.1	4	7.1	2	17.89	898	30.49	1,848
59	8.8	3	5.6	2	20.40	1,025	32.07	1,944
61	7.8	3	4.5	1	17.82	895	30.88	1,872
63	6.8	2	3.4	1	16.80	844	33.61	2,037

(注) 蚕糸業要覧その他による。製糸設備台数の単位は戦前は釜、戦後は台。

第5表-2 工場当り設備台数, 工場当り繭生産高, 設備当り繭生産高等の推移

	工場当り設備台数		工場当り従業者数		工場当り繭生産高		設備当り繭生産高		設備当り従業者数	
	実 数	指数	実 数	指数	実 数	指数	実 数	指数	実 数	指数
昭和元年	75.8 釜	100	91.6 人	100	86.2 トン	100	1.14 トン	100	1.21 人	100
3	90.8	120	112.7	123	100.0	116	1.10	97	1.24	102
5	86.1	114	105.2	115	106.1	123	1.23	108	1.22	101
7	82.8	109	100.9	110	99.8	116	1.21	106	1.22	101
9	82.9	109	95.7	104	108.2	126	1.31	115	1.15	95
11	92.3	122	107.7	118	128.7	149	1.40	123	1.17	97
13	104.4	138	119.1	130	153.0	177	1.47	129	1.14	94
15	103.2	136	114.2	125	184.4	214	1.79	157	1.11	92
17	240.6	317	N. A	N. A	392.9	456	1.63	143	N. A	N. A
19	163.0	215	N. A	N. A	786.5	912	4.82	424	N. A	N. A
21	134.5	177	235.5	257	234.5	272	1.74	153	1.75	145
23	163.5	216	277.4	303	212.6	247	1.80	114	1.70	140
25	163.3	215	202.7	221	266.7	309	1.63	143	1.24	102
27	166.4	220	213.4	233	352.7	409	2.12	186	1.28	106
29	162.8	215	197.6	216	337.8	392	2.08	182	1.21	100
31	161.6	213	182.7	199	373.7	434	2.31	203	1.13	93
33	149.0	197	176.5	193	462.2	537	3.10	273	1.18	98
35	105.0	139	136.2	149	509.2	591	4.85	426	1.30	107
37	98.5	130	133.3	146	550.5	639	5.59	491	1.35	112
39	88.2	116	130.1	142	596.8	692	6.77	595	1.48	122
41	85.6	113	123.6	135	603.4	700	7.05	619	1.44	119
43	89.8	118	122.2	133	724.6	841	8.07	709	1.36	112
45	95.5	126	113.4	124	707.0	820	7.40	650	1.19	98
47	92.7	122	91.4	100	695.3	807	7.50	659	0.99	82
49	97.9	129	92.3	101	706.2	819	7.21	634	0.94	78
51	100.7	133	81.8	89	635.0	737	6.30	554	0.81	67
53	99.3	131	70.1	77	574.6	667	5.79	509	0.71	59
55	100.8	133	71.8	78	557.3	647	5.53	486	0.71	59
57	95.3	126	55.9	61	496.1	576	5.21	458	0.59	49
59	93.6	123	59.6	65	531.9	617	5.68	499	0.64	53
61	96.3	127	55.6	61	506.2	587	5.26	462	0.58	48
63	90.7	120	45.3	49	386.7	449	4.27	375	0.50	41

(注) 第5-1表その他より算出

第5表-1 第5表-2に関係する統計を掲示した。まず器械製糸運転可能設備台数をみると、昭和元年28万5千釜を擁し、その後さらに増加を示すが、第2次大戦を境に激減し、戦後も年々減少を示し、昭和63年には僅かに6,800台となっている。従業者数も当初34万5千人を擁し、わが国を代表する工場労働者数を示したが、その後さらに増加を示した後、第2次大戦を境に激減し、昭和63年には僅かに3,400人となっている。昭和元年を100%として、設備(釜)台数2% 製糸従業者数1%という減少ぶりを示している。

つぎに設備当り、従業者当りの生産性をみると、昭和元年を100%として、設備当りは昭和43年に23.06俵と最高に達し、以後減少して、昭和63年には16.8俵となっている。また従業者当りは、設備の場合とは異なり、年々増大を示し、昭和63年には、昭和元年の20倍となっている。つまり従業者数は減少を示したものの、生産性はなおも増大を示している。これは結果論ではあるが、製糸業といわず、およそ産業が存続してゆくためには避け難い途行であろう。

つぎに工場の設備規模をみると、一時拡大するが、その後縮少し、ほぼ昭和初頭と同規模であ

る。一方工場当りの従業者数はむしろ減少気味である。また工場当り、設備当りの繭生産高（これは繭収納高の意味である）を見ると、工場の場合も、設備の場合も昭和43年に最高（前者724.6トン、後者8.07トン）に達するが、以後減少に減少を重ねている。工場数の減退よりも、また設備数の減退よりも、繭生産高の減退の方が早いということであろう。最後に設備当りの従業者数を見ると、昭和41年ごろより年々減少をつづけ、昭和63年には0.5人で、1人で2台の設備を担当しているということになる。昭和初年に1.2人であったことを考えると、かなりの能率の向上ではある。

要するに、昭和45年以降にはじまる繭減産の過程は、製糸工場を巻き込み、製糸工場は経営対応的に、工場数を減らし、設備数を減らし、従業者数も減らすなどして、工場当り、設備当り、従業者当りの生産性を維持しながら、推移してきたといえるであろう。

6. 昭和年間における生糸の国内引渡高と生糸の流通業者在庫高の推移

第6表 生糸国内引渡高と生糸生産高、生糸在庫高の推移

	生糸国内引渡高A		生糸生産高B		A/B		年末生糸在庫高C		C/B	
	実数	指数	実数	指数	実数	指数	実数	指数	実数	指数
昭和元年	N. A 千俵	N. A	568.8 千俵	100	N. A %	N. A	N. A 俵		N. A %	
3	N. A	N. A	661.5	116	N. A	N. A	N. A		N. A	
5	N. A	N. A	710.3	125	N. A	N. A	N. A		N. A	
7	N. A	N. A	693.2	122	N. A	N. A	27,817	100	4.0	100
9	N. A	N. A	754.1	133	N. A	N. A	31,408	113	4.2	105
11	N. A	N. A	705.5	124	N. A	N. A	21,336	77	3.0	75
13	321.0	100	719.2	126	44.6	100	16,584	60	2.3	58
15	357.9	112	712.8	125	50.2	113	28,929	104	4.1	103
17	463.4	144	452.9	80	102.2	229	33,873	122	7.5	188
19	N. A	N. A	154.0	27	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A
21	N. A	N. A	94.2	17	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A
23	141.2	44	144.3	25	97.8	219	77,490	279	53.7	1,343
25	132.8	41	177.0	31	75.0	168	15,116	54	8.5	213
27	192.0	60	256.7	45	74.8	168	11,697	42	4.6	115
29	179.8	56	257.9	45	69.7	156	17,148	47	5.1	128
31	232.4	72	312.8	55	74.3	167	16,708	60	5.3	133
33	203.6	63	333.6	59	61.0	137	15,630	56	4.7	118
35	256.9	80	300.8	53	85.4	192	16,887	61	5.6	140
37	254.9	79	331.6	58	76.9	172	12,323	44	3.7	93
39	284.0	88	324.3	57	87.6	196	25,175	91	7.8	195
41	323.7	101	311.6	55	103.9	233	15,417	55	4.9	123
43	343.4	107	345.9	61	96.5	216	29,671	107	8.6	215
45	407.6	127	341.9	60	119.2	267	22,468	81	6.6	165
47	503.5	157	318.9	56	157.9	354	23,786	86	7.5	188
49	363.6	113	315.6	56	115.2	258	83,169	299	26.4	660
51	357.2	111	298.1	52	119.8	269	47,792	172	16.0	400
53	352.5	110	266.0	47	132.6	297	75,589	272	28.4	710
55	262.6	82	269.2	47	97.5	219	158,387	569	58.8	1,470
57	265.6	83	216.5	38	122.7	275	159,544	573	73.7	1,843
59	202.0	63	179.7	32	112.4	252	190,278	684	105.9	2,648
61	176.3	55	139.0	24	126.9	285	162,164	583	116.7	2,918
63	225.6	70	114.4	20	197.3	442	60,116	216	52.6	1,315

（注）蚕糸業要覧その他による、生糸在庫高には価格安定事業団の在庫をふくむ。

第7表 生糸現物相場、繭掛目などの推移

	生糸現物相場A		繭掛目B		生糸製造販売費C		生糸原価D		A/D	
	実数	指数	実数	指数	実数	指数	実数	指数	実数	指数
昭和元年	26 円		22.4 掛		N. A 円		N. A 円		N. A	N. A
3	22		16.5		N. A		N. A		N. A	N. A
5	13		9.3		5.85		13.15		0.85	86
7	12		5.7		5.30		11.00		1.09	110
9	9		5.5		5.64		11.14		0.81	82
11	13		10.0		6.44		13.44		0.79	80
13	13		8.7		N. A		N. A		N. A	N. A
15	25		N. A		4.12		N. A		N. A	N. A
17	26		16.0		N. A		N. A		N. A	N. A
19	28		24.0		N. A		N. A		N. A	N. A
21	206	8	213.4	11	157.0	23	370.4	14	0.56	57
23	1,421	56	693.3	37	738.5	106	1,802.2	70	0.79	80
25	2,539	100	1,866.0	100	696.4	100	2,562.4	100	0.99	100
27	3,761	148	2,940.0	158	888.8	128	3,828.8	149	0.98	99
29	3,792	149	2,583.0	138	898.6	129	3,481.6	136	1.09	110
31	3,303	130	2,567.0	138	851.6	123	3,418.6	133	0.97	98
33	2,947	116	2,045.0	110	777.4	112	3,822.4	110	1.04	105
35	3,411	134	2,932.0	157	649.1	93	3,581.1	140	0.95	96
37	4,631	182	3,652.0	196	881.0	127	4,533.0	177	1.02	103
39	4,327	170	3,341.0	179	1,032.7	148	4,373.7	171	0.99	100
41	6,261	246	5,353.0	287	1,162.9	167	6,515.9	254	0.96	97
43	6,835	269	5,372.0	288	1,309.2	188	6,681.2	261	1.02	103
45	8,075	318	6,443.0	345	1,423.7	204	7,866.7	307	1.03	104
47	7,755	305	6,403.0	343	1,662.7	239	8,065.7	315	0.96	97
49	9,897	389	7,580.0	406	2,333.8	335	9,913.8	387	1.00	101
51	12,437	489	9,795.0	525	2,642.9	380	12,437.9	485	1.00	101
53	14,758	581	11,907.0	638	2,871.7	412	14,778.7	577	1.00	101
55	14,642	576	11,337.0	608	2,944.2	423	14,281.2	557	1.03	104
57	14,861	585	11,654.5	625	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A
59	13,474	530	9,985.0	535	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A
61	12,254	482	9,379.4	503	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A
63	12,636	497	10,818.1	580	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A	N. A

(注) 蚕糸業要覧による。B + C = D

すでに第3表より、生糸の輸出は昭和47年頃より壊滅に近づくが、一方内需は同年において50万俵を越える大台に乗せる。しかし、この傾向は永続せず、49年以後急角度の減退傾向を見せる。生糸の在庫（事業団在庫を含む）は49年頃より増えはじめ、55年には15万俵という高水準に達する。これは同年の生糸生産高の58.8%である。この傾向はさらにつづき、59年には実に19万俵という大量に達するのである。要するに糸価水準が高く、消費がふるわないということが直接の原因である。しかし、このような高水準でありながら、繭の生産がふるわないということも、この時期におけるわが国蚕糸業の矛盾があるといえよう。結局糸価水準は引下げられるが、同時

に繭価も引下げられ、養蚕業の衰退は加速され、そしてこれは製糸業の衰退も加速するというのが、この時期の蚕糸業の特色である。

結局は、縮少均衡という形で、縮少した需要に見合わせる形で、養蚕業も製糸業も、規模を縮少した形で存在しているというのが、偽らざる現下の状況ではないかと考えられる。生糸相場下落と、繭掛目(これは繭価を糸歩にて除することによって算出される。いわゆる繭元《まゆもと》のこと)の低下が観測される。(第7表参照)生糸製造販売費は昭和57年以降は具体的な数値を入手し難いので、製糸業の採算状況は把握できない。いずれにしても、蚕糸業の不況はおおいたい事実ではある。

7. むすび

本稿は、はしがきにおいて述べたように、小野直達氏の著書に刺激されて、昭和年間における蚕糸業の推移について一覽した。紙幅もなくなったので結論を急ぐことにしよう。

昭和年間における蚕糸業の推移を主題とする本稿において、特徴的にとりあげた問題点は、養蚕業と製糸業の衰退過程の類似性に関するものであったといえよう。昭和元年を100として、昭和63年の諸数値が、養蚕戸数において3、繭生産量において9、器械製糸工場数において2、器械製糸運転釜数において2という水準は、蚕糸業衰退過程の中で、養蚕業と製糸業が相対応して衰退してきたということを示すものである。

その理由については、すでに述べたので、ここにさらにくりかえすことを避けるが、要するに国産繭のわが国製糸業に対する独占的性格により、養蚕業の衰退を真正面から受けることになるのである。正に一連托生的な性格がそこに見出されるといってよいであろう。

蚕糸業再生の途筋は、製糸業の原料を国産繭にかぎる、あるいは絹業の原料を国産生糸を優先するという、従来とられてきた規制の緩和こそが、まずその第一歩となるのではあるまいか。

(平成8年10月15日受理)